



2牛群における黄色ブドウ球菌とコアグラゼ陰性ブドウ球菌 ET研究所ニュース
に起因する乳房内感染症に対するワクチン接種の有効性 2016年 4月号

原題: Efficacy of vaccination on *Staphylococcus aureus* and coagulase-negative staphylococci intramammary infectin dynamics in 2 dairy herds. Y. H. Schukken *et al* J. Dairy. Sci. 97. 5250-5264

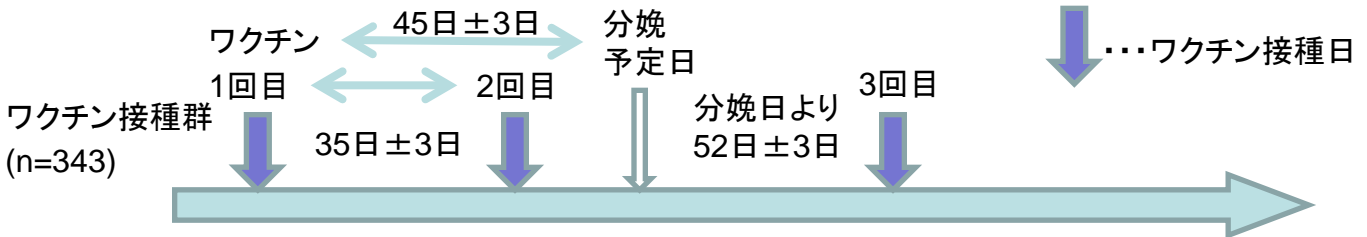
欧米ではすでに発売されていた乳房炎のワクチンが、ついに日本で発売されるようです。以前ご紹介させていただきましたが、乳房炎は受胎率の低下に関与することがあります。このワクチンは、大腸菌群や、黄色ブドウ球菌などに対するワクチンで、分娩後130日まで、それらが原因の乳房炎の発症率を抑え、症状を低減する効果があるそうです。今回はその乳房炎ワクチンに関連した文献をご紹介させていただきます。

目的:

この研究は、黄色ブドウ球菌(SA)とコアグラゼ陰性ブドウ球菌(CNS)に起因する乳房内感染症を減らすことを目的としたワクチンのフィールドでの評価を目的とした。

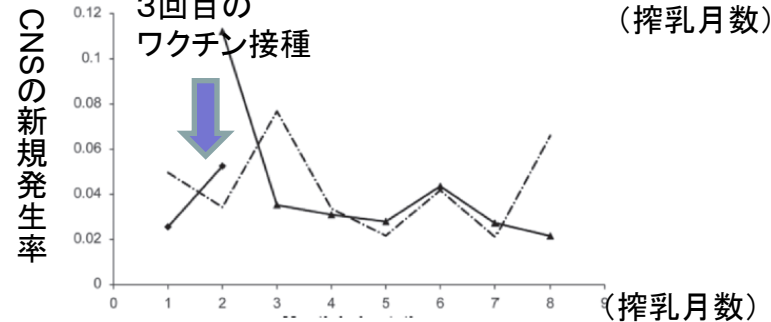
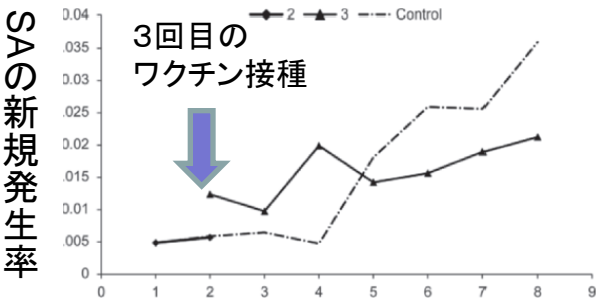
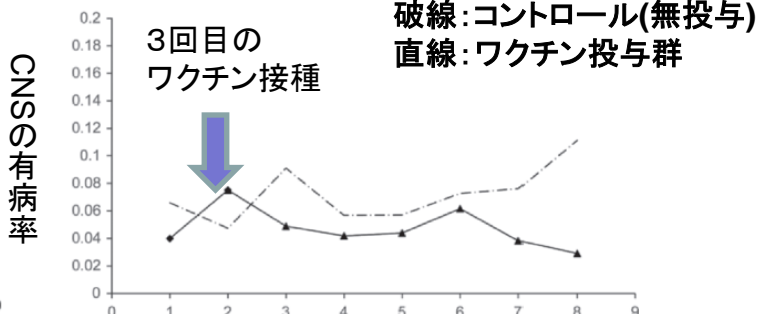
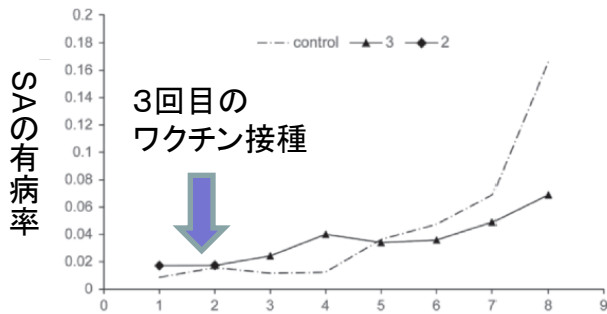
材料と方法:

2牛群において18-21か月間試験を行い、809頭の1001泌乳期を試験に用いた。1頭の牛を2回試験に用いるときは、同じ試験群(ワクチン投与した牛は2回目も投与する)にした。



コントロール群: ワクチン接種なし (n=658)

結果:



まとめ: ワクチン接種は、SAとCNSの有病率、新規発生率の低減に有益なツールとなるだろう。

文責: 波山